

日本産タマムシ科概説 (15)

黒沢良彦

**XI. Subfamily Trachydinae** チビタマシ亜科  
 先のナガタマムシ亜科 *Agriolinae* に含まれることもあるが、本誌第4号(1968)に掲げた亜科の検索表の中で示した通り、両中基節窩の間は前基節窩間の距離よりも幅が広い点でナガタマムシ亜科から区別される。小型種は次のケンツブタマムシ亜科 *Mastogeniinae* にも似て来るが、前胸背の後縁は常に波曲し、一直線ではない点で異なる。

小型の種類ばかりを含み、体長7mmを超す種類はほとんどない。極地とニュージーランドを除くほとんど全世界に分布し、多くの属を含む。小型種が多いので、特徴を把握し難く、広分布の大属が多い。

加害植物は双子葉植物が主であるが、タマムシ科の中ではこのグループになって始めてイネ科などの単子葉植物につくものが現れる。また、中には羊歯植物につく種類も現れるが、恐らく、これは原始的な食性ではなく、双子葉植物に加害するのが原則であったのに、二次的に羊歯植物に転

化したものと考えた方がよいであろう。このことは、ナガタマムシ亜科とチビタマムシ亜科では、他の亜科では普遍的に見られる裸子植物への加害例が全く見当らなく、両亜科はタマムシ科の中では比較的最近になって急激に分化したものであると考えられるからである。恐らくタマムシ科の食性はコメツキダマシ科 *Eucnemidae* のような朽木を食べるものから発展して来たもので、次第に枯木、生木と食性を

広げて行ったものであろう。従って、生きた植物を食べるナガタマムシ亜科やチビタマムシ亜科はその進化の頂点にあるものと考えてよいであろう。なお、チビタマムシ亜科には草本を食べるものが多いが、

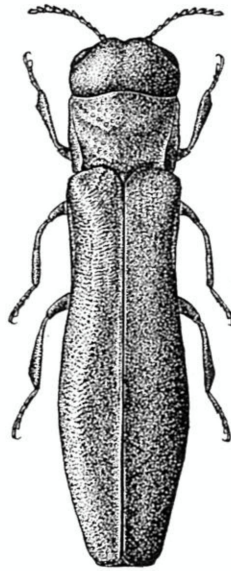
これは乾燥気候への適応であって、この科の食性はあくまでも木本が中心である。

チビタマムシ亜科のうち細長い体をしたものの多くは木枝や草の茎に穿入する穿孔虫 (stem borer) であるが、短小な体をしたものの幼虫の多くは葉肉に潜入する潜葉虫 (leaf miner) である。

日本を含む東亜に産する属は次の9属であるが、これは次の3族に分けられるであろう。

1. — 後附節第1節は第2節より明瞭に長く、第2, 第3節を合した長さとはほぼ等しい………**A. *Cylindromorphini***  
 — 後附節第1節は第2節とはほぼ等長………2.
2. — 脛節は腿節の下方にある溝の中に受け入れられる………**B. *Aphanisticini***

— 脛節は自由 ………………**C. *Trachydini***  
**A. *Tribe Cylindromorphini*** ホソツツタマムシ族  
 ナガタマムシ亜科のナガタマムシ族と次のケンタマムシ族を結ぶ中間に位し、後附節の構造はナガタマムシ族であるが、頭部の複眼の位置、触角窩の構造、頭楯の形などはケンタマムシ族に近い。しかし、食性や複眼の位置に重点を置き、本族をチビタマムシ亜科に移した。L. SCHAEFER, (1949) は本族と次族



ホソツツタマムシ *Faracylindromorphus japonensis* (北降館, 日本昆虫図鑑, 1950)

の特徴に複眼が前胸背の前縁からはるかに距った所にある点を挙げているが、次族に入るエグリタマムシ属 *Endelus* H. DEYROLLE, 1864 の中には、ほとんど前縁に接するものから著しく距った所にあるものまであるし、新大陸の *Taphrocerus* SOLIER, 1833 や *Brachys* DEJEAN, 1833 などはいずれも前胸背の前縁から多少へだたった所に複眼が位置しているので、複眼の位置を族の分類に使うことは出来ない。

本族はヨーロッパ、アフリカ、マダガスカル、アジアなどに3属約100種を産するが、サハラ以南の熱帯アフリカに最も種類が多い。主として乾燥地の種類であるが、インドからジャワ、ボルネオ、フィリピンに至る熱帯アジアにも約10種が知られている。東亜には次の3属を産するが、日本にまで分布するのはその中の1属だけである。

1. —触角は11節……………2  
—触角は10節，体はやや短太……………  
……………34. *Cantonius* THÉRY, 1929
2. —前胸背に内側隆線がある……………  
……………35. *Paracylindromorphus* THÉRY, 1928  
—前胸背に内側隆線を欠く……………  
……………36. *Cylindromorphus* KIESENWETTER, 1857

#### 34. Genus *Cantonius* THÉRY, 1929 カントンタマムシ属

中国南部の広東産の *C. terryi* THÉRY, 1929 と共に新属新種で記載された属であるが、その後中国とビルマから4種が記載された。ホソツタマムシ属のように細長い筒状ではなく、やや短太で後方に多少広がる種類が多い。中国からビルマにかけて5種類が知られている。或いは台湾あたりから発見されるかも知れないが、日本からは望みがないであろう。

#### 35. Genus *Paracylindromorphus* THÉRY, 1928 ホソツタマムシ属

アフリカ、ヨーロッパ、アジアに約70種を産するが、サハラ以南のアフリカに最も多く、今でも新種が追加されている。其他では、北アフリカに4種、ヨーロッパに1種、中央アジアに3種、インドからジャワ、フィリピンに至る熱帯アジアに約10種、中国に6種、台湾に1種、アムールから1種、日本から2種が知られている。幼虫はイネ科植物の茎の穿孔虫であるが、幼虫の判明している種類はヨーロッパの1種だけである。

日本からは上記の通り2種が記載されているが、その他に、アムールから記載された種類も産するので、合計3種を産する。

1. *P. japonensis* (E. SAUNDERS, 1873) ホソツタマムシ 分布：日本(本州，四国，九州)，朝鮮，中国。体長3.9~5.2mm。暗い唐金色，翅端は細かい鋸歯状，翅鞘の皺は中央までで，それ以後は弱より次第に消失する。A. THÉRY は1928年に本種をヨーロッパに広く分布する *P. subuliformis* (MANNERHEIM, 1837) のシノニムにし、1942年にはその亜種として取り扱っている。しかし、東亜の

ものは、ヨーロッパから中央アジアにかけて分布する *subuliformis* とは異った独立種として取り扱い、朝鮮，満洲，中国などのものは *japonensis* の亜種とした方がよいであろう。ただし、大陸のものはまだ命名されていない。幼虫はススキにつくらしいが、はっきりした形態の記載はない。アレチノギクなどいろいろな植物の葉上で見つかることが多い。本種の種名は *japonensis* が正しく、*japonensis* は誤りである。クロタマムシの亜種名も同様である。

2. *P. richteri* THÉRY, 1936 アラメホソツタマムシ 分布：日本(本州)，朝鮮，満洲，アムール。前種によく似ているが、細長で、前胸背が後方に強く狭まり、翅鞘の皺が後方迄まであり、翅端は細く、腹端節の形が異なる。アムール地方から記載された種類であるが、私は満洲の牡丹江、朝鮮の水原産の標本を検し、さらに山梨県甘利山産の1♀(26. vii, 1956, 佐々治寛之氏採集)を検した。

3. *P. tokioensis* THÉRY, 1936 トウキョウホソツタマムシ 分布：日本(本州)。1936年に A. THÉRY が東京から記載した種類で、ホソツタマムシにとてもよく似ているが、やや大形で、翅端が全く鋸歯状を呈さない。私はこれに当る標本を見たことがない。

#### 36. Genus *Cylindromorphus* KIESENWETTER, 1857 ヒメホソツタマムシ属

ヨーロッパ、中央アジア、モンゴルなどに約20種を産する。草原の種類で、体長2.3mm。幅0.4mmと云う微小な種類もある。東亜ではモンゴルのキヤフタ(Kiachta)から *C. mongolicus* OBNENBERGER, 1934が知られるだけである。満洲あたりには産するかも知れないが、日本からは期待できないであろう。

#### B. Tribe Aphanisticini ケシタマムシ族

脛節が腿節の溝の中に嵌入するので、肢を上げた標本を作るのに苦勞する一群である。*Aphanisticus* 属のように複眼が前胸背の前縁から離れて位置するものから *Galbella* 属のように複眼が一部前胸背板の下に隠れて見えないものまでいろいろあり、L. SCHAEFER を始めフランスの研究者が扱っているような、複眼の位置によって *Aphanisticini* ケシタマムシ族と *Trachydini* チビタマムシ族を分けることは不可能である。A. DESCARPENTRIES は *Aphanisticus* と *Endelus* 両属のみ *Aphanisticini* に含め、残りは *Trachydini* に含めた(1963, 1964)が、*Endelus* 属の中には複眼が前胸背の前縁にほぼ接するものから、はるかに離れて位置するものまで、各種の段階があり、ヨーロッパでこそ複眼の位置で族を分けることは可能であるが、他の地域のものでは不可能である。従って、私はこの特徴を用いるのを避け、新たに腿節の構造をこの族の特徴として採用した。しかし、この特徴を基にする限り、従来 *Trachydini* に含められていた *Pachyscelus* SOLIER, 1833 及び *Galbella* WESTWOOD, 1848 両属は *Aphanisticini* に含めなければならなくなる。

旧世界から新世界にかけて広く分布しているが、

熱帯地方に多く、南下または北上するに従い種数が激減する。また島嶼にも種類が少ない。

1. —触角は自由……………2.  
—触角は後胸板にある溝の中に収められる……………3.
2. —触角は先端の4節が鋸歯状……………  
……………37. *Aphanisticus* LATREILLE, 1829  
—触角は先端の6節が鋸歯状……………  
……………38. *Endelus* H. DEYROLLE, 1864
3. —小楯板は小さく、縦長の三角形、体の背面は膨隆する…39. *Galbella* WESTWOOD, 1848  
—小楯板は大きく、横長の三角形、体の背面は膨隆せず、やや扁平……………  
……………40. *Pachyscellus* SOLIER, 1833

### 37. Genus *Aphanisticus* LATREILLE, 1829

ケンタマムシ属

ヨーロッパ、アフリカ、マダガスカル、アジア、オーストラリアの極地を除くほぼ全域に300余種類を産する。その形は極めて変化が多く、細長いものから短太なものまでいろいろあり、群に分けることさえ困難であるが、その中で *A. yasumatsui* Y. KUROSAWA ヤスマツケシタマムシに代表される、頭頂が深く割られ、翅鞘に隆条が走る一群はアフリカから東亜にかけて多くの種類があり、一群としてまとまっている。ヤスマツケシタマムシには外観上小楯板が認められないが、同じ群の中にも認められる種類もあり、ウバタマムシ亜科のリタマムシ族 *Chrysochroini* やツツタマムシ亜科のフナガタマムシ族 *Acmaeoderini* などでは族を分ける程の特徴でありながら、このケンタマムシ属の中では、小楯板の有無は属や亜属を分ける特徴とさえなり難い。

日本には次の4種を産する。

1. *A. antennatus* E. SAUNDERS, 1873 ヒゲブトケンタマムシ 分布：日本（九州）、中国。体長3.5mm内外、暗い唐金色、細長く、前胸背は前方に広がる。G. LEWIS の第1回の採集品に基いて記載された種類で、産地は単に Japan と書かれているだけでどこだか判らない。模式標本は1頭だけで、これにも詳しい産地ラベルがない。しかし、恐らく長崎であろうと推定される。日本では極めて稀なものらしく、私はまだその後日本で採れた標本を見たことがない。大英博物館には上記の模式標本の他に中国産の8頭が保管されており、中国ではそれ程稀なものではないらしい。

2. *A. congener* E. SAUNDERS, 1873 クロケンタマムシ 分布：日本（本州、九州）、中国。体長3mm内外、黒色、短太。本種も G. LEWIS の第1回の採集品に基いて記載されたもので、産地は記されていない。大英博物館には日本産4頭と中国産1頭がある。私は山形県鳥海山麓、福島県会津若松、東京二子玉川、愛知県豊田市、福岡市、京都などの標本を検した。どこでも稀なものらしく、加害植物もはっきりしない。成虫越冬し、河原の石下などでよ

く見つかる。中国にも分布し、私は山東省産の5頭を検した。東京目黒から記載された *A. budhaicus* OBENBERGER, 1944 は疑いもなく本種のシノニムで、恐らくは故矢野宗幹先生の採集品に基くものであろう。

3. *A. fossidiscus* OBENBERGER, 1944 チュウジョウケンタマムシ 分布：琉球（沖縄）、中国。次のヤスマツケシタマムシに似ているが、前胸背の形が異り、側縁が後方で波曲しない。従って後縁角が鈍角となる。中国の福建省の山地から記載された種類であるが、沖縄本島与那産の標本に基いて、中条道夫博士が1959年に始めて記録した。恐らく OBENBERGER の同定によるものと思うが、その間の事情は判らない。しかし、手許にある与那産の1頭は台湾産の *A. formosanus* OBENBERGER, 1944 と較べて、翅鞘の光沢が強く、隆脈の状態が異なるのに前胸背の形はそれ程異ならない。一方日本産の次種に較べると、翅鞘の状態はよく似ているのに、前胸背の形は明らかに異なる。恐らくは沖縄特産の種か亜種であろうと考えられるが、中国産の *fossidiscus* の標本と比較出来ないし、中国の福建、江西両省からはこの他にもよく似た種類が記載されているので、直ちにこの種名を導入出来ないような気がする。

4. *A. yasumatsui* Y. KUROSAWA, 1954 ヤスマツケシタマムシ 分布：日本（本州、九州）。前種によく似ているが、前胸背の側縁後方の波曲が強く、翅鞘の縦隆も強い。中国の江西省の山地から記載された *A. harlequin* OBENBERGER, 1944 は本種にもよく似ているので或いは同一種かも知れない。福岡県の犬鳴山で安松京博士が採集された標本を基にし、それに福岡市平尾、福岡県英彦山産の標本を加えて記載したものであるが、その後北九州各地で採れている他、本州では京都市貴船、新潟県新発田市などで採れた標本を検した。幼虫はカンスゲの潜葉虫で夏の終り頃成虫になって越冬、翌春またカンスゲの葉上に見られる。

上記 *fossidiscus* と *yasumatsui* は台湾の *formosanus*、中国の *punctulivertex* OBENBERGER, 1944, *harlequin*、フィリピンの *bakeri* FISHER, 1922、マレー半島の *perakensis* OBENBERGER, 1924、ボルネオの *bohaci* OBENBERGER, 1924 などと共に、細長で扁平、翅鞘に縦隆条があるなどの点で、真の *Aphanisticus* とは区別されると思うが、材料不足で確信が持てない。これらの種類は全部小楯板が認められないのが特徴であるが、フィリピンの *costipennis* FISHER, 1922 やボルネオの *corniceps* OBENBERGER, 1924などは形はこの仲間と同じであるのに明らかな小楯板を持っているので、小楯板の有無はこの仲間の特徴に加えることは出来ないと思う。なお、明らかにこの仲間と考えられる種類はアフリカにもいるが、ヨーロッパや北アフリカにはいない。

38. Genus *Endelus* H. DEYROLLE, 1864 エグリタマムシ属

インドからニューギニアに至る熱帯アジアに種類

が多く、一部はオーストラリア北部や日本にまで及んでいる。約100種を含んでいるが、日本にはそのうち3種が知られ、未記載種が2種ある。体形はホソツタマムシに似たナガタマムシ型から、短太で下ぶくれのチビタマムシ型までいろいろあり、一見同属とは考えられないものもある。また、前記の通り、複眼の位置も千差万別で、この属を見ている限りでは、複眼の位置や体形を基に *Aphanisticini* と *Trachydini* の2族に分けるヨーロッパ式の分け方は意味がなくなって来る。

1. *E. collaris* (E. SAUNDERS, 1873) キンイロエグリタマムシ 分布: 日本(本州, 九州, 屋久島, 種子島, 対馬), 中国, 台湾。体長5mm内外, 真鍮色で, 細長く, 両側はほとんど平行, 前胸背はやや銅色を帯びる。G. LEWIS の第1回の採集品に基づいて記載されたもので, これは産地を長崎と明記してある。E. SAUNDERS は本種を *Aphanisticus collaris* として記載したが, それは誤で実際は *Endelus* 属であることを指摘したのは A. THÉRY (1928) である。そのためにスマトラから記載された *E. collaris* KERREMANS, 1900 がホモニムで消え, *kerremansi* THÉRY, 1932 が用意されたが, この名は台湾から記載された *E. parallelus* KERREMANS, 1912 が *E. parallelus* KERREMANS, 1900 (スマトラ) のホモニムになるので, 前者に用意された *kerremansi* THÉRY, 1927 のそのまたホモニムになると言うややこしい結果を惹き起した。結局, スマトラの *collaris* KERREMANS, 1900 には *kerremansiellus* OBENBERGER, 1935 と云う名が付けられてこの問題はけりになったが, どう云うわけか OBENBERGER は台湾の *kerremansi* を 1944 に再び *parallelus* にもどしている。なお, この話には台湾の *E. kerremansi* THÉRY, 1927 そのものも *collaris* と同一種で, せいぜい亜種として残るだけと云うおちまでついている。

幼虫は確認されていないが, 成虫は羊歯類の中助上に見られ, 一枚の葉に幾つもついていることも珍らしくない。白水隆教授は種子島でオオヤブソテツ, 奄美大島でオオヤブソテツから採集され, 私は沖縄本島の与那でコモチンダから採集し, 対馬の有明山でも日蔭に生える羊歯類から多数採集した。

日本本土産の原亜種は前胸背の色が銅色を帯びることが少なく, 側縁は後方の後縁角の前で明らかに波曲し, 翅鞘の色も唐金色を帯びて来るが, 屋久島, 種子島, 奄美諸島, 沖縄本島, それに対馬産は, 前胸背の側縁が様に膨出するだけで, 後方で波曲しなく, 銅色が強く, 翅鞘も真鍮色が強く, 九州本土や本州のものとは明らかに異なる。この型は台湾に産する亜種 *kerremansi* THÉRY, 1927 と同じであるので, これを使っただけであろう。大陸の福建省からは亜種 *continentalis* OBENBERGER, 1944 が記載されているが, これはより大型で頭強, 翅鞘の点刻は弱く, 複眼の内縁の凸出は円味が強いなどの点で異ると云う。北ベトナムから記載された *E. similis*

DESCARPENTRIES, 1963 も恐らくは *continentalis* OBENBERGER, 1944 と同じものであろう。

2. *E. eous* OBENBERGER, 1944 クロエグリタマムシ 分布: 日本(本州, 九州)。体長3.5mm内外。黒色, 顔面と前胸背の側縁部だけが金緑色を帯びる。通常は稀な種類であるが, 時にはかなりの数が見つかることがあるらしい。山口県萩市, 福岡県志賀島, 吉井町, 宮崎県日向ラインなどの標本を検した。幼虫の加害植物はイヌビワであるらしい。なお, 三輪勇四郎博士と中条道夫博士が1940年に和歌山から記録された *E. evus* OBENBERGER と云う種はどんなものか判らないが, 恐らくは OBENBERGER の同定ラベルの *E. eous* を *evus* と読み誤られたものと思う。もしそうだとしたら, 記載される前に本種は *evus* と誤って記録されたことになる。

3. *E. japonicus* OBENBERGER, 1944 カタビロエグリタマムシ 分布: 日本, 台湾。体長3~4mm, 銅黒色, 顔面は唐金色, 頭と前胸背は銅色が強く, 体下は黒色, 小楯板は三角形で大きく, 翅鞘の肩部は前胸背の後縁より著しく幅が広い。翅鞘の基半は強く点刻され, それが融合して強い横皺となる。J. OBENBERGER が1944年に Japan から記載したものであるが, 私は日本産の本種に当る標本を見たことがない。手許にある台湾蓮花池で採れた1頭(21. v. 1974, 横山創氏採集)が私がプラーグ国立博物館で見に来た模式標本に一致するものであるが, 戦前は台湾や樺太の標本まで Japan と云うラベルを付けて外国に送られていたことが多いので, 本種も恐らくは日本産ではないのではないかと考えられる。

4. *E. sp.* アカガネエグリタマムシ 分布: 日本(本州, 淡路島, 四国), 琉球(奄美大島)。体長4~5mm, 明るい銅色, 頭頂の剝れは弱く, 背面の点刻は微弱。極めて稀な種類で, 戦前に故大林一夫氏が岐阜市で採集したのが最初で, その後和歌山県由良町, 高知市, 奄美大島湯湾岳などで採集された標本を検した。大林氏の採集品は故平山修次郎氏の手に渡り, 同氏の死後行方不明になってしまった。本種は日本およびその近隣地方から記載されたどの種にも当らず, 新種と思われる。久松定成氏が本四架橋調査報告書の中で, 淡路島から *E. japonicus* OBENBERGER として写真入りで報告されたものは明らかに本種で, 真の *japonicus* ではない。

5. *E. sp.* キヌツヤエグリタマムシ 分布: 琉球(八重山諸島), 台湾。体長約3mm, 体は前後に狭まり, やや扁平, 頭胸部は金唐色, 翅鞘はやや緑を帯びた暗い唐金色, 強い絹糸光沢があり, 一見艶消し状。前胸背に特異なくぼみがある。台湾産は暗色で緑がかかった光沢がない。石垣島で入江平吉氏が採集されたもので, 入江氏はカクレミノから数頭を採集されたが, 秋山黄洋氏は台湾で羊歯類から2頭を採集された。(国立科学博物館)

渡辺 泰明

*Lucanus gamurus* SAWADA et Y. WATANABE  
ミクラミヤマクワガタが沢田文正博士及び筆者によって御蔵島から発見され、新種として記載されてから既に15年が経過したことになる。その間、本種に関する断片的な報告はいくつか散見されるが、生態的知見はきわめて乏しく、蛹化の時期や越冬態等に関してはほとんど不明の状態であった。筆者はこれらの疑問を解明するため、再度にわたって本種の幼虫を飼育したが、遂に羽化は愚か、蛹に至るまでも生育させることができなかった。しかし昨年、当時御蔵島に在島されていた山村慶昭氏の御厚意で、5月初旬に里部落周辺で採集された老熟幼虫7頭の御恵を受け、三度飼育の機会を得ることができた。その結果、全て雌個体ではあるが3頭を蛹化、その内固定標本に保存した1蛹を除いた2蛹を羽化させることに成功した。そこで従来をとりまとめると共に、新たに得られた知見を合せ報告し諸賢の参考に供する次第である。

なお、本稿を草するに当り、相馬州彦及び山村慶昭の両氏からは生態に関し多くの御教示を仰ぎ、豊島園昆虫館の吉谷昭憲氏には幼虫の1部を飼育管理して戴いた。また、前波鉄也氏には幼虫の写真を、斎藤秀生及び鈴木互両農大昆虫学研究室員には蛹の写真を撮影していただいた。ここに上記諸氏の御厚意に対して心から御礼申し上げる次第である。

#### 飼育方法

幼虫は過去の飼育失敗の反省から2群に分け、1群を農大昆虫学研究室で、他の1群を豊島園昆虫館に依託して、それぞれ別個に飼育を行った。飼育容器は内径8.3 cm、深さ7.5 cmのガラス製腰高ジャーレを使用し、それに土壌を8分目まで入れ、幼虫を1頭づつつけて単独飼育した。そして従来飼育経験から高温をさけるため、農大昆虫学研究室では飼育容器を約22℃の恒温状態の室に、一方豊島園昆虫館では7～8月の盛夏にはルーム・クーラーを動作させ、日中の高温時でもほぼ20℃の室温状況下の室にそれぞれ収納し、飼育管理を行った。

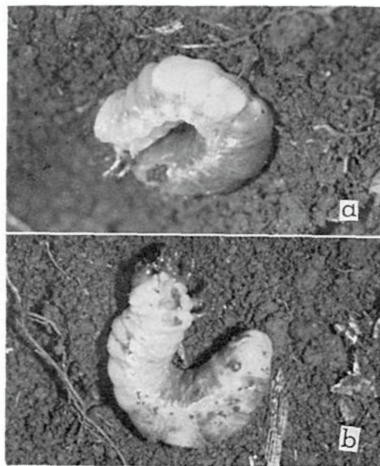
#### 飼育経過

**卵** 産卵は雌成虫が出現する5月下旬～7月初旬にかけて行われるものと考えられるが、野外における探索や飼育を通じても未だ卵は採取されていない。しかし若令幼虫の全てが土中から発見されているので、卵が土中に産み込まれるのは間違いないものと考えられる。但し、市川(1973)は朽木中からも本種の幼虫が採集されたと報じており、この報告に間違いがなければ、朽木中への産卵も考えねばならない。しかし筆者は朽木中からは本種の幼虫を確認することはできなかった。

**幼虫** 表皮はきわめて薄く透明である。従って、表皮を通して体の内部が透けて見えるが、中には写

真に示す様に胸部背中側に白色を呈する数個の球状体を持つものがみられる。この球状体が何を意味するのかは不明だが、個体によっては大きさに種々の変化が認められる。この様な表皮の弱さは幼虫の死亡原因と無関係ではない様で、粗雑な取扱いは直ちに表皮の損傷をまねき、飼育容器も1匹ずつ個別にしない場合には、互に体表を傷つけ合い死亡する原因となった。また羽化まで生育に成功したものは、盛夏においてもほぼ22℃以下の室温状態の室内で飼育した場合のみで、30℃以上にまで室温が上昇する室内での飼育は全て失敗した。この結果は、幼虫が高温や温度変化の激しい環境では生育できないことを意味しているのかもしれない。

幼虫は夜間活動型の様で、昼間の活動はほとんど見られない。飼育容器の中では通常5～7 cmの土中に、体の背面で周囲の土壌を多少押しつけた空隙を作ってその中に生息しているが、実際の生息地ではハチジョウススキが生育している土中に好んで生息し、特に根毛のからみ合っている部分に多く見られる。この様な現象は幼虫の食性と関連をうかがわせているが、幼虫がこの植物の根毛を摂食して生育するとの確認は未だなされていない。しかしハチジョウススキの生育している御蔵島の土壌にはきわめて腐食質に乏しい状態のものもあり、その様な生息環境ではハチジョウススキの根以外の食糧源を考へることには無理がある様に思われる。しかし前記の市川の報告通り、幼虫が倒木下の土中や朽木中等にも生息していることに間違いがなければ、ハチジョウススキの根だけを食するとは限らないことになる。ちなみに筆者はオヒシバの根を、吉谷昭憲氏とはオヒシバの根及びリンゴの果実の双方を餌として与



第1図 ミクラミヤマクワガタ終令幼虫; a. 背面面, b. 腹側面

えたが、いずれの場合も幼虫が摂食した形跡はなく、幼虫の後腸域にたまった食物の残しから判断すると、土壌とともに腐食質を摂食している可能性をまったく否定することもできない。

幼虫の令期は3令と考えられるが、市川（前出）の報告にも見られる通り、御蔵島においては同一時期に令期の明らかに異なる幼虫を同時に観察することができる。従って、本種の全幼虫期間は少なくとも2年にまたがるであらうことは疑いない事実の様に思われる。

蛹 蛹化した3個体は前述の通りいずれも雌で、体長約28mm内外であった。それらの1個体は豊島園昆虫館で飼育したもので、地表から約5cmほどの土中で蛹化した、他の2個体は農大昆虫学研究室で飼育したもので、いずれも地表で蛹化した。蛹は全て背面を下に腹面を上に向けたあお向けの状態で、指等で体にふれると、腹部をくねらせる反応を示した。蛹化時期は豊島園昆虫館の個体は9月4日、農大昆虫学研究室の個体は9月5日及び9月7日で、いずれの場合も9月初旬に限られている。しかし飼育した環境条件が夏期でも23℃以上に温度が上昇しない室内であったことを考慮すると、野外の自然状態でも蛹化がこの時期に行われるとは断言できないが、御蔵島での4月から7月にかけての採集調査で、蛹を発見することができなかつた事実を考え合せると、蛹化の時期が秋期であることはほぼ間違いないことと思われる。

豊島園昆虫館の蛹は9月24日、農大昆虫学研究室の蛹は10月8日にそれぞれ羽化し、蛹の期間は前者では20日、後者では31日で、羽化時刻は後者の場合、午後2時から3時にわたる約1時間であった。羽化したばかりの成虫は純白だが、ほぼ1日後には赤褐色の正常の体色になった。しかしほとんど移動することなく、そのままの状態越冬した。従って、野

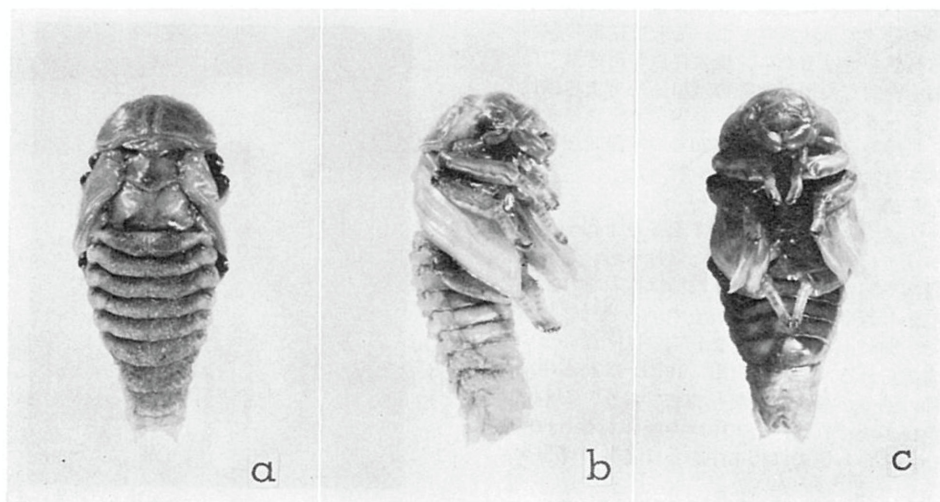
外においては若令幼虫とともに、秋期に土壌中で羽化した成虫が、そのままの状態越冬するものと考えられる。

成虫 御蔵島においては樹林内の小径や畑等島内の随所に見られ、また標高650mの御山鈴原の様な高所においても採集されている。出現時期は5月初旬頃からで、この時期には圧倒的に雄が多い。しかし7月の採集では雌の死骸が多く得られる反面、雄はほとんど見られないことから、6月中～下旬以降は雌が多く出現する可能性が考えられる。

地表に出現した雄は周囲を無定位に歩き廻るが、その様子は雌に遭遇する機会を得るための様に思われる。事実、雄は交尾意欲がきわめて旺盛で、たまたま雌に遭遇した場合には直ちに交尾行動に移る。交尾姿勢は完全な背負い式で、雄は雌の背中に乗り、そして背方から大股で雌の後頭部を抱きかかえ、両触角を斜前方に強く伸展させる。雄雌とも全ての個体は地表をはいかいするのみで、正常と思える立派な後翅を有しているにもかかわらず、飛翔活動がまったく見られないことは、翅膜と翅脈間のアロモルフオーシスの上できわめて興味深い。なお、市川（前出）は成虫が畑の土壌中に孔をうがって、その中に生息していることを報じたが、筆者が飼育容器内で成虫を観察した折にも、土壌中に潜り込む個体が多く見受けられた。

#### 参考文献

- SAWADA, H. & Y. WATANABE, 1960. Description of a new species of Lucanid-beetle from Mikura Island in the Izu Islands, Japan. *Jour. Agr. Sci. Tokyo Nogyo Daigaku*, 6 (2): 99-102.  
沢田玄正・渡辺泰明, 1969. 御蔵島の昆虫相. 農学集報, 14 (1): 1-48.  
市川敏之, 1973. ミクラミヤマクワガタ採集記. 昆虫と自然, 8 (9): 22-24.  
——, 1974. 伊豆諸島のクワガタ (三宅島, 御蔵島, 八丈島). 同上, 9 (5): 19-20. (東京農大)



第2図 ミクラミヤマクワガタの蛹(雌); a, 背面: b, 側面: c, 腹面。

## カミキリムシ科の大腿の分類学的価値 (予報)

下村 徹

カミキリムシ科の分類に関する研究は、17世紀以来今日まで数多くの学者によってなされてきた。これらの研究は比較形態学を基盤としたもので、カミキリムシ類の様々な特徴を比較検討することによって推進されてきた。しかし口器の構造の詳細な比較研究はなされていない様で、近年、GRESSITT (1970: *Cerambycid beetles of Laos, Pac. Ins. Monogr. 24*) によって亜科の識別点として用いられているに過ぎない様である。筆者はかねてからこの様な口器の構造上の差異が、カミキリムシ類の higher taxon を分類する識別点として、さらには系統を検討する上での一つの形質として有効であるか否かについて関心を抱いていた。そこでこの問題に取り組む手初めとして、筆者の手許にある日本産各種の標本を材料として、カミキリムシ科の各亜科に含まれる代表的な種の大腿の構造を比較検討してみた。但し、検視個体が上述の如く日本産の種類に限られているので不十分な面が多く、未だ整理された見解を持つに至っていないが、ここでは予報的に各亜科に含まれる種の大腿について紹介したい。

なお、この研究及び発表を通じて終始懇篤な御指導を賜った東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明助教授に心から御礼申し上げるとともに、貴重な標本と有益な助言をいただいた鎌刈哲二、斎藤秀生及び鈴木互諸氏にも深く感謝する。

### カミキリムシ類各亜科の大腿

カミキリムシの大腿は機能的には羽化後の食餌植物からの脱出や、産卵の際、食餌植物に与える咬傷等のために使用される。従ってその形状はきわめて頑丈で強くスクレロチン化されている。

種内の個体変異はほとんど見られず、きわめて安定した形質と考えられるが、雌雄間においても *Parandrinae*, *Prioninae* 及び *Lamiinae* を除いた他の亜科では形態的差異は、ほとんど認められない様である。以下各亜科の代表的な種を選んでそれらの大腿について紹介する。

#### 1. *Parandrinae* ニセクワガタカミキリ亜科, *Prioninae* ノコギリカミキリ亜科, *Spondyliinae* クロカミキリ亜科.

上記3亜科に含まれる種の大腿は、いずれも大きく頑丈で、切歯部が伸長する共通性が認められるので、ここに一括して紹介する。

左右の大腿は非相称であるが、*Prioninae* のウスバカミキリやノコギリカミキリではそれが特に顕著である。切歯部の先端は *Prioninae* や *Parandrinae* では歯状にとがる。しかし、コゲチャトゲフチオオウスバカミキリの♂では左大腿の先端部は截断され、その中央は狭く湾入している。また、アマミニセク

ワガタカミキリの♀は先端部の腹面に痕跡的な1歯が認められる。切歯部内縁 (*Cutting edge*) には中央附近にいくつかの歯状突起が認められる。臼歯部は3亜科とも痕跡的で明瞭な臼状構造はない。

#### 2. *Lepturinae* ハナカミキリ亜科

日本産ハナカミキリ亜科は *Xylostenini*, *Encyclopini*, *Rhagiini*, *Stenocorini*, *Lepturini*, *Eroschemini*, *Necydalini* の7族によって構成されるがこれらの大腿はフタコブシリハナカミキリ、モモグロハナカミキリ、モモブトハナカミキリ等の1部の種類を除いては、ほぼ正三角を呈している。切歯部中央附近の内縁に近い下面には、*prostheca* が存在し、多数の柔毛が密生しているが、これは本亜科に含まれるほとんどの種が訪花性であることと関係しているのかも知れない。臼歯部は全ての族に認められる。また *Philini* は本亜科とノコギリカミキリ亜科との中間的存在で *Crowson* (1955) はこれを *Philinae* として独立させ、その後 *GRESSITT* (1970) もこの取扱いを踏襲している。筆者は幸いにも、台湾産の *Philus pallescens* カンショハナカミキリの大腿を検視することができたが、本種の切歯部にはハナカミキリ亜科の特徴と思われる *prostheca* を欠き、さらに臼歯部の臼状構造も認められず、*Prioninae* のウスバカミキリやノコギリカミキリ等の大腿にきわめて類似している。

#### 3. *Disteniinae* ホソカミキリ亜科

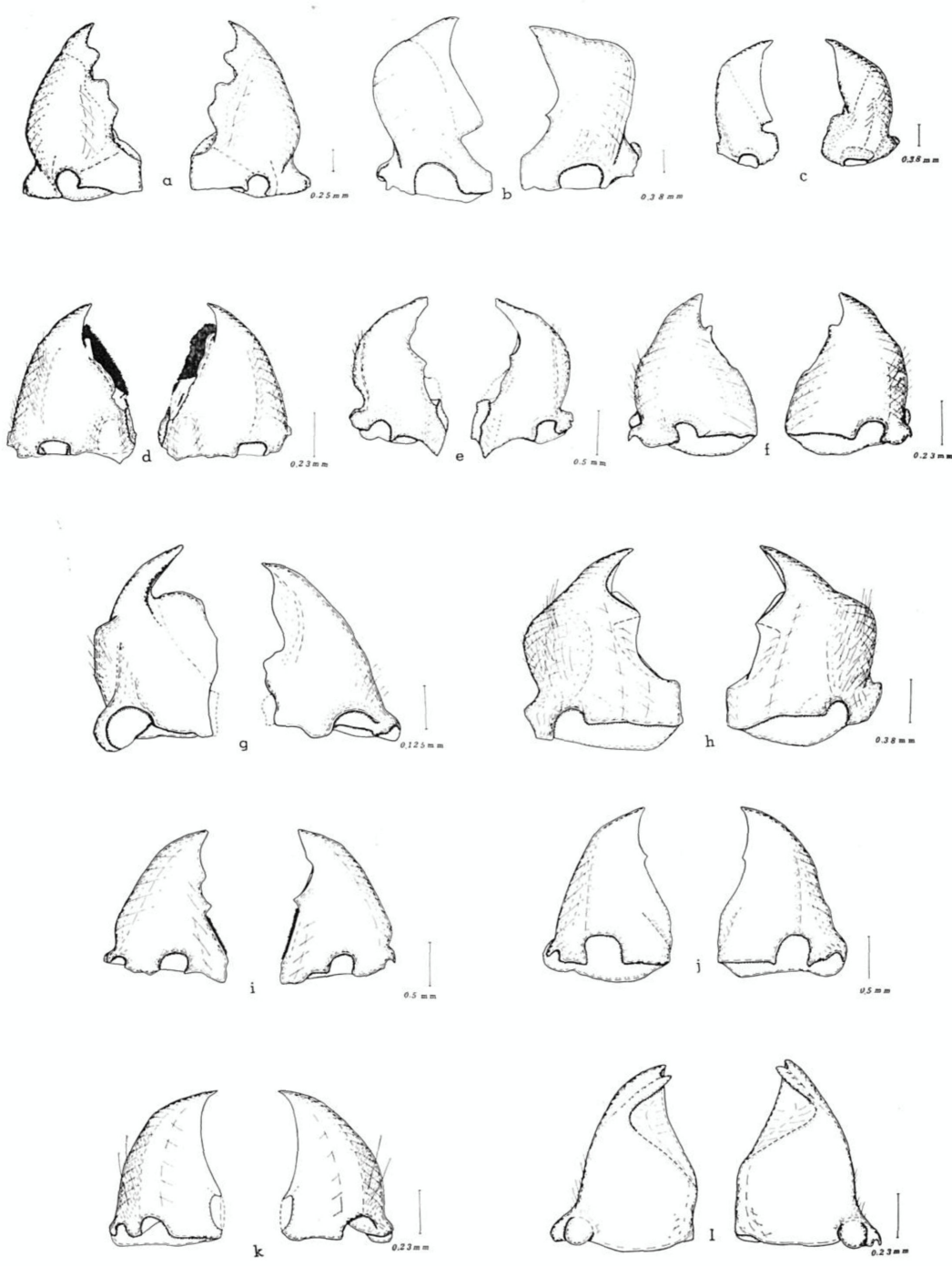
本亜科は日本にはホソカミキリとオオクボカミキリの2種が分布しているに過ぎない。両種の大腿切歯部の先端は狭く円まるが、*prostheca* は両種とも膜状物が明らかに認められ、上縁には微細な毛を具えている。臼歯部の構造も両種は互いに良く類似している。両種の大腿の全般的構造はハナカミキリ亜科のそれに比較的似ている様に思われる。

#### 4. *Aseminae* マルクビカミキリ亜科

この亜科には *Asemini* と *Atimiini* の2族が含まれている。*Asemini* の大腿はハナカミキリ亜科のそれに類似し、ほぼ正三角形を呈するが、*prostheca* と臼歯部を欠いている。また左右とも切歯部先端近くに鈍い一歯を具えている。一方、*Atimiini* に含まれる種として *Atimia okayamensis* ケブカマルクビカミキリの大腿を検視したが、左右非相称で、その形態はきわめて特異である。また膜状の *prostheca* が認められるが臼歯部は認められない。

#### 5. *Cerambycinae* カミキリムシ亜科

本亜科に含まれる種の大腿の形状は多くの変化に富んでいるが、いくつかのタイプに分けられる様に思われる。切歯部は先端がとがり、内縁には、無歯のものから1歯、或は2歯を有するものまで見られる。しかし、ジャコウカミキリ、アオカミキリ、ミ



カミキリムシ各種の大股 (a—k, 背面:l, 腹面; a, ♀: b—l, ♂)。  
 a. アマニセクワガタカミキリ; b. ノコギリカミキリ; c. カンショハナカミキリ; d. ハネビロハナカミキリ;  
 e. ホソカミキリ; f. オオマルクビヒラタカミキリ; g. ケブカマルクビカミキリ; h. イエカミキリ;  
 i. オオアオカミキリ; j. オオンロカミキリ; k. ラミーカミキリ; l. ドウボソカミキリ。



ドリカミキリ, オオアオカミキリ, アカアシオアオカミキリ, ヤクシマミドリカミキリ, オオシマミドリカミキリ等が含まれる *Callichromini* では左大腿に2歯, 右大腿に1歯をそれぞれ具えており, これら歯の数には変異が見られず, きわめて安定している。白歯部は大多数のものには見られない。しかしアオスジカミキリ, オガサワラチャイロカミキリ, イエカミキリ等では, 痕跡的に白歯部が存在している。

本亜科に含まれる種のうち訪花性種では, *prostheca* の柔毛を具えているがアオスジカミキリ, オガサワラチャイロカミキリ, アマミムネスジウスバカミキリ, イエカミキリ, トラフホソバナカミキリの様に花や樹液に集来しない種ではこれを欠いている。しかし, *Callidini* 族には, アカネカミキリ等の様な訪花性種も含まれているが, *prostheca* が認められない。従って訪花性と *prostheca* の存在とを短絡的に結びつけることは出来ない。

#### ○九州祖母山のベニバハナカミキリの色彩について

ベニバハナカミキリ *Paranasia anaspidoides* (BATES) は北海道から屋久島まで分布するが, いずれの地域においても少ない種ようである。本種はその和名から判るように美しい赤色の翅をもっているが, 沢田・渡辺両氏 (1969, 農学集報14(1), p. 32) により伊豆諸島御蔵島産の個体は上翅が黒色を呈することが知られた。今回筆者は, 西村正賢氏より高橋 宏氏採集の祖母山産の本種を譲り受けたが, これら個体が標本を見る角度によって上翅の色彩が黒色となることに気づいたので, 諸賢の参考になればと思いここに記しておきたい。

3頭, 大分県祖母山々頂, 24-26. vii. 1975, 高橋 宏採集。

手許の石渡裕之氏採集の東京世田谷, 神奈川県逗子, 横須賀産の計1♂2♀♀は, 上翅端部がいくぶん黒化の傾向が認められるものの一面赤色であった。一方, 上記祖母山産の3個体(触角の長さから判断すればすべて♂)はいずれも, 肩部から後方にかけての細く短い部分はあざやかな赤色, 肩部から小楯板斜め後方にかけての狭い部分は暗赤色(上翅基部の内側および小楯板付近は黒色)だが, 翅の大部分であるその他の部分は一面黒色であった。上翅の微毛の色は全面が東京・神奈川産の個体と同じにあざやかな赤色であるために, 標本を見る角度によって赤色にも黒色(肩部の一部を除いて)にも見えるものであった。以前に筆者が東京農大で御蔵島産の本種を見せていただいた際は, 肩部の一部が赤い以外は全面黒色としか覚えていないが, おそらく御蔵島産のものは上翅の微毛までも黒化しているものと予想される。そうすると, 祖母山産の上記3個体はちょうど東京・神奈川産と御蔵島産との中間的な色彩をもったものと判断されよう。どなたか各地の本種を検討していただきたく思う。

なお, 東京・神奈川産と上記祖母山産の個体とは

#### 6. Lamiinae フトカミキリ亜科

この亜科に含まれる種の大腿は, 切歯部の先端が鋭く尖るものから, この部分がえぐられて2歯を呈するものまで見られる。切歯部内縁はほとんどの種では無歯であるが, 先端付近に1歯を有するものもある。また上面内側はやや半月形にえぐられ, そこに数本の縦隆条が認められる。白歯部は本亜科を通じて全く見られない。また *prostheca* もほとんどの族に認められないが, *Saperdini* 族の中には, 小さな膜質部として認められる種が存在する。

以上がカミキリムシ各亜科の大腿に見られるおおまかな特徴であるが, これらの特徴は higher taxon において, かなりの共通性が認められる。しかしながら不十分な材料に基づいての研究であるがために, 思わぬ錯覚や見当違いの誤りをおかしている恐れもなしとしない。従って今後さらに多くの材料について検討を進めたいと考えているので, 学兄諸氏の御助言と御鞭達を心から御願ひする。(東京農大)

上翅端外角の形状などいくぶん差が見られるが, 各3頭の標本しか見ていないために即断は避けておく。

末筆ながら, 貴重な標本を下さった石渡裕之, 西村正賢, 高橋 宏の各氏にお礼申しあげる。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

#### ○山口永良部島の天牛数種

新潟県園芸試験場の桜井 精氏が1973年7月23日に鹿児島県口永良部島で採集された下記の天牛を検することができた。いずれも屋久島高枝発行の口永良部島調査報告(1974)と伊藤 淳, 守屋健次両氏の報告(月刊むし50号, 1975)にある種類ばかりではあるが, ここに一応記録して採集者桜井 精氏の御好意に報いたい。

1. *Euryptoda (Neoprius) batesi* GAHAN ベーヒラタカミキリ 1♀.
2. *Chlorophorus quinquefasciatus* (CASTELNAU & GORY) ヨツスジトラカミキリ 1♂, 1♀.
3. *Psacothoe hilaris insularis* HAYASHI キボンカミキリ(熊毛亜種) 1♀.
4. *Olenecamptus bilobus taiwanensis* DILLON & DILLON ムツボシシロカミキリ 1♂.
5. *Rhodopina orientalis* YOKOYAMA クチノエラブコブヒゲカミキリ 1♂.

(新潟県新発田市, 小池 寛)

#### ○茨城県のカノコサビカミキリの記録

カノコサビカミキリ *Apomecyna naevia* BATES, 1873は暖地性のカミキリとして知られ, 現在まで関東北部からは記録されていなかった。しかし今回, 茨城県水戸市で採集された本種を下記の如く検する事ができたので報告する。なお, 本種を採集された小山 敦, 渡辺 健, 小倉健夫, 沼田 稔の諸氏によれば全個体ともカラスウリのツルから採集されたという。発表を許された上記諸氏に深謝する。

11頭, 12-26. viii. 1975, 小山 敦, 沼田 稔, 小倉健夫, 渡辺 健採集。(東京農大, 久保田正秀)

## 日本産カンショコガネ属概説(1)

小林 裕和

カンショコガネ属 (Genus *Apogonia* KIRBY) は、東洋熱帯地方を中心として日本、中国、インドそしてヒマラヤなどを含む地域、およびアフリカの中南部地域に分布しており、現在までにこの両地域において約 250 種類ほどが知られている。分布の北限近くに位置している我国には、九州・沖縄地方を中心に 4 亜種を含め 11 種が分布している。しかし、北海道からはまだ本属の分布記録はなく、本州においてさえ *Apogonia amida* LEWIS だけ 1 種類が分布しているにすぎない。そのため、現在までに我国においては、カンショコガネ属に関して書かれた論文はあまり多くなく、一般にもよく知られていないことが多い。そこで筆者は、我国に産する本属の種類の分類の大要を記して御参考に供する次第である。なお、学名の取扱いについては、現在使われているものをそのまま使用し、学名についての検討はここではしないことにした。

1. *Apogonia amida* LEWIS ヒメカンショコガネ  
 黒色で光沢があり、時としてやや淡い紫銅色を帯びる。頭部および前胸背は細かく点刻されるが、小楯板はほとんど点刻されない。頭楯は台形で、浅いが密に点刻される。前縁はきわだって上反する。前胸背は短く、側縁は後方で強くわん曲する。前縁角は突出せず、ほとんど直角をなす。後縁角はなだらかに円みを帯びる。鞘翅は比較的細密に点刻されるが、個体によってはかなり粗い。前脛節には 3 外歯を有するが、一番基方にある外歯は非常に小さく、時としてほとんど目立たない。

現在のところ本属に含まれる種類のうち、本州に分布するのは本種ただ 1 種である。本種は、低地および低山地帯に産することが多く、春から夏にかけての出現期以外にも、冬季や初春では、河原の草や石の下などからしばしば越冬中の個体を見出すことができる。体長 7~8.5mm. 分布：本州、四国、九州；台湾、中国。

2. *Apogonia bicarinata* LEWIS フタスジカンショコガネ。

本種は、九州本土から沖縄地方に分布しているが、地域により以下のような亜種に区別されている。

### a. subsp. *bicarinata* LEWIS

長円形、黒色で光沢があり、個体によっては弱い赤褐色を帯びる。頭部は密にそして強く点刻される。頭楯は弓状であるが、前縁角はやや角ばり、前縁はほとんど直線状かあるいは、わずかにわん入し、辺縁は細く上反する。前胸背の点刻は、頭部に比べてやや細かい。前縁角は鈍く、突出しない。後縁角はなだらかな円みを帯びる。鞘翅の点刻は強く密で、中央にある 2 条および会合部の 1 条の条溝は平滑である。前尾節板および尾節板は、しわ状に点刻され中央に明らかな縦の隆線を有する。前脛節には 3 外歯

を有し、前方にある 2 歯は接近する。体長：8.5~11mm. 分布：九州、奄美大島。

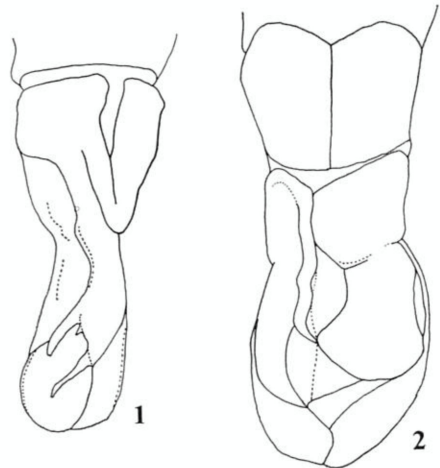
### b. subsp. *okinawana* NOMURA

体は粗く点刻される。前尾節板および尾節板にある縦の隆線は、基亜種に比べさらに顕著である。鞘翅の線条は、やや中高で、先端から中央にかけて列状の点刻を有する。体長：9~10mm. 分布：沖縄本島。

### c. subsp. *yaeyamana* NOMURA

鞘翅の点刻は、基亜種とほとんど同じ程度であるが、前胸背の点刻は、大きく密で中央には縦の点刻を欠くためらかな部分を有する。前尾節板および尾節板にある縦の隆線は、大部分の個体では明らかであるが、稀に不明瞭なことがある。体長：9~11mm. 分布：石垣島、西表島。

上記の 3 亜種のほかに、台湾には別亜種である、*A. bicarinata sauteri* MOSER が産する。



1, 2: 雄交尾器 (背面図)

1: *Apogonia amida* LEWIS; 2: *A. bicarinata* LEWIS

(東京都練馬区)

### ○東京都心のスナムグリヒョウタンゾウムシ

今年 (1975) 9 月 4 日の夕刻、千代田区三番町の宮内庁分室の湯殿で足を洗うつもりで足を見たら、見かけないゾウムシがついている。手許の日本昆虫図鑑に出ていなかったので、黒沢良彦氏に同定を依頼したところ、スナムグリヒョウタンゾウムシ *Scepticus tigrinus* ROELOFS であつた。本種は海浜の砂地に多いと聞いているが、採集場所は海岸からかなり距つた所で、付近には砂地もない。学習研究社の中高生図鑑Ⅱ、甲虫によると野菜の害虫で、畑地にもいるように記してあるから珍らしくはないかも知れないが、一応報告する。(常陸宮正仁親王)

## 日本産 *Pidonia* の覚え書 (8)

### 蔵王山の *Pidonia* 属

窪 木 幹 夫

ミズナラやブナで代表される落葉広葉樹林は、気候帯からみれば冷温帯、垂直分布からみれば山地帯の極相として成立する。ブナは、北海道西南部黒松内を北限とし、九州大隅半島高隈山を南限とし、北では海拔0mから、南では海拔900m以上に分布する。山地帯の下限はカン帯やモミツガ帯に、上限は亜高山性針葉樹林にそれぞれ接し、水平的にも垂直的にも日本列島の基準的植生となっている。東北地方の亜高山帯は飯豊山、朝日岳、月山等の日本海側の山々では針葉樹林を欠き、複雑な形の落葉広葉低木林が発達するが、奥羽山脈等の太平洋側の山々にはアオモリトドマツ林が発達する。

熊野岳を最高峰とする蔵王連峰は、奥羽山脈の南部にあって山形、宮城の県境に位置する。調査地域は山形県側で、大きく区分すれば、標高約1350m以下のブナ林とそれ以上のアオモリトドマツ林に区別できる。またアオモリトドマツ帯の下部ではダケカンパが混在し、高山帯はハイマツ、ハクサンシャクナゲの低木林となっている。筆者は1974年から当地域で各種の調査を開始したが、今回はそれらの中から垂直分布調査の結果を報告する。各種 *Pidonia* はシモツケ、ヤグルマツウ、ミヤマシシウド、ショウマ類、ハクサンシャクナゲの花上から採集された。

調査年月日：1975年7月29～30日。

調査コース：不動沢→ドッコ沼(1280m)→パラダイス十字路(1320m)→ザンゲ坂→ワサ小屋跡→熊野岳山頂(1841m)。

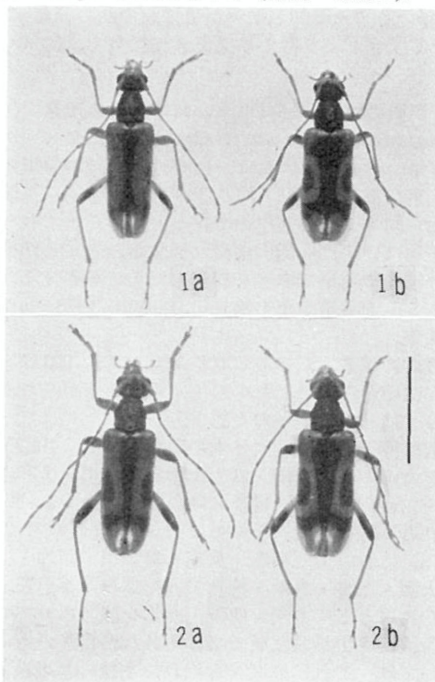
1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ 1♂, 1♀ (1280～1360m)。
2. *P. japonica* OHBAYASHI et HAYASHI ニッポンヒメハナカミキリ 16♂♂, 9♀♀ (1320～1600m)。
3. *P. mutata* (BATES) ヒメハナカミキリ 1♂, 1♀ (1330～1550m)。
4. *P. maculithorax* PIC カクムネヒメハナカミキリ 14♂♂, 14♀♀ (1200～1650m)。
5. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ 4♂♂ (1200～1270m)。
6. *P. masakii* (TAMANUKI) ムネアコヨコモンヒメハナカミキリ 106♂♂, 105♀♀ (850～1650m)。  
本種は中部地方以北の本州に広く分布するが、東北地方のものは *f. hiurai* OHBAYASHI et HAYASHI で上翅の黒斑が退化し、雄では latero-basal marking と latero-median marking を残すだけで、雌でもこれらに加えて latero-posterior marking と sutural vitta がわずかに広がるものである。*P. debilis* と似るが、前胸の形態、後脛節先端部の色(*P. debilis* では黒、*P. masakii* では褐色)で区別できる。採

集した多数の中には上翅の斑紋が発達し、前胸が黒褐色の個体も散見された。

7. *P. amentata kurosawai* OHBAYASHI et HAYASHI セスジヒメハナカミキリ 2♀♀ (1350m)。

8. *P. miwai* (MATSUSHITA) ミワヒメハナカミキリ 3♂♂, 8♀♀ (1050～1350m)。

9. *P. sp.* 5♂♂, 2♀♀ (1320～1600m)。



1. *P. miwai* (MATSUSHITA); 2. *P. sp.*: a. ♂; b. ♀, (scale = 5 mm)

*P. miwai* と非常に良く似るが、本種はアオモリトドマツ帯に分布し、垂直的な“棲み分け”現象が観察された。ブナ林とアオモリトドマツ林は標高1350～1400m付近で入れ代るが中間地域では混棲している。このような地域では両種が同じ花上(シモツケ・ショウマ類)から採集された。両種は出現期にも違いがあり、*P. miwai* は6～7月、本種は7～8月に及ぶ。本種は *P. miwai* に比べて次のような相違点がある。触角はより太く、前胸の前後縁はより強くえぐられる。上翅の斑紋のうち latero-median marking は雌雄とも長円形で、♀の sutural vitta は latero-basal marking と分離する。中、後胸腹板と腹板は雌雄とも黒色(*P. miwai* は雄の1～3腹板、雌の中、後胸腹板が黒色)である。以

上の点から本種は、本覚書(5) Nos. 25, 26で報告した *P. sp.* に最も近縁と思われる。現在、蔵王山の他、船形山、栗駒山の分布を確認している。

10. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ 66♂♂, 40♀♀ (900~1650m)。

以上のように今回の調査では、10種(総個体数398頭)の *Pidonia* が採集された。*P. masakii*, *P. debilis* が全体の80%を占め生態的優占種となっており、残りの8種は全体のわずか20%にすぎない。垂直分布からみれば、*P. masakii*, *P. debilis*, *P. maculithorax* がブナ帯を中心にアオモリトドマツ帯まで厚く分布する。*P. puziloi*, *P. grallatrix*, *P. miwai* がブナ帯に、*P. japonica*, *P. mutata*, *P. sp.* がアオモリトドマツ帯におのおの分布する。アオモリトドマツ帯より採集された中で、*P. sp.* は

他地域とも比べあわせるとアオモリトドマツ帯に限定分布するもので、寒冷な東北地方の亜高山帯だけに分布することは興味深い。*P. amentata kurosawai* は初夏に出現する種で7月下旬には極めて稀である。筆者は、本覚書(2), Nos. 19, 20で東北地方には、10種の *Pidonia* が分布すると記したが、今回新たに、*P. mutata* と *P. sp.* を追加することができた。しかし、すでに記録されている、*P. discoidalis* PIC と *P. simillima* OHBAYASHI et HAYASHI は採集されなかった。東北地方の *Pidonia* 相は、中部山岳地方や四国などに比べて貧弱であるが、東北地方特産の *P. japonica* や北海道、東北特産亜種 *P. amentata kurosawai* など興味ある種類も分布し、今後とも調査が望まれる。(東京農大)

### ○千葉県のカミヤビロウドコガネとその知見

*Maladera kamiyai* (SAWADA) カミヤビロウドコガネについては、私は、関東地方では神奈川県大山・東京都五日市町・同八王子市浅川・同八王子市城山・同八王子市高尾山で採集している。これらの採集地はいずれも低山地帯に属する。ところが今回平野部の千葉県で本種を採集したので報告する。

1♂, 千葉県千葉市検見川, 1. viii. 1975, 石田正明採集。

燈火に飛来したアカビロウドコガネ約100頭をしらべた中から発見したもので、千葉県下からの記録としてはじめてのものと思う。

沢田博士は原記載(日本の甲虫, 1(1), 1937)で、伯耆大山・大和松山・富士山中湖・箱根・大和上北山村; 台湾の立鷹・霧社・阿里山の産地をあげておられる。野村氏はそのモノグラフ(桐朋学報, 23号, 1973)において、栃木・東京・神奈川・新潟・山梨・大阪・奈良・鳥取・徳島・鹿児島諸都府県をあげ、産地として本州・四国・九州を認められているが、沢田博士が原記載であげられた台湾産のものについては、これに疑問をもたれ、本種の産地としては台湾を一応除外されている。

以上から考えると、本種の現在の既知産地は、北海道および東北本州をのぞいた、いわゆる西南日本にかたよっている。さらに沢田博士のあげられた台湾のものが本種であれば、沖縄県からの記録の可能性はあるが、野村氏のいわれるように台湾のものが別種であれば、その可能性は何ともいえない。

本種は沢田博士が1937年に伯耆大山(鳥取県)の1♂を模式標本として、*Serica* 属の新種として記載されたものであるが、その後あまり採集の報告がない。これは本種がビロウドコガネ・ヒメビロウドコガネ・オオビロウドコガネと一見よく似ているので、混同されていることが多く、精査すればもっと多くの産地があげられるのではないかと考えられる。

成虫の出現期は、私の所蔵する標本では、3月、8月、11月とがあって、3月および11月のものは土中よりほりだしたものである。沢田博士は4月、6

月、7月、8月(台湾では5月)をあげられ、野村氏は1月、4月、5月、6月、7月、8月、9月の各月をあげられている。野村氏の1月とされたものは、栃木県大田原で採集されたもので、これは多分土中からほり出されたものと推測される。従って、成虫の出現期は大へんに長く、ビロウドコガネ、ヒメビロウドコガネとほぼ同時期のように考えられる。また成虫が初冬(11月)から早春(3月)にかけて、土中よりほりだされていることは、晩秋には羽化したものが、そのまま土中で越冬するようにも思われる。この点も前記の2近似種と生態がにているようである。

私はさきに、ビロウドコガネとヒメビロウドコガネについて、その微分布の点で、棲み分けが行われているのではないかとの意見を發表したが、本種を含めての3種についても今後注意を続けてみたいと思っている。(東京都杉並区, 石田正明)

### ○ *Necydalis* 2種の採集記録

1. *Necydalis gigantea* KANO オニホソコバネカミキリ

1♀, 四国石鎚山, 24. vii. 1958, 鴨脚慶夫氏採集・所蔵。

本種は屋久島から北海道まで分布するが、四国からは確実な採集記録の無かつたものである。筆者は京都市の鴨脚慶夫氏が石鎚山のかなり高所において樹種不明の立枯木より採集された標本を確認した。同氏の許可を得て報告しておく。

2. *Necydalis formosana niumurai* HAYASHI トガリバホソコバネカミキリ

1♂, 奈良県大台ヶ原山, 29. vii. 1969; 4♀♀, 同所, 8. vii. 1973, いづれも筆者採集・所蔵。

本種は中村俊彦氏らによる食樹発見以来各地で容易に採集されるようになったが、大台ヶ原山より確実な記録は見当らず、最近刊行された「大杉谷・大台ヶ原自然科学調査報告書」(1972)にも記録されていないので一応報告しておく。(宇治市, 水野弘造)

# 青森県産天牛類の覚え書

阿 部 東

青森県産天牛類のリストは、下山(昆虫学評論, 16, 2~17, 2, 1964)によるものが最も信頼出来る。著者はこのリストをもとに、青森県内におけるいくつかの資料を紹介する。なお青森県には青森県博物目録(1941)があるが、分類にかなり問題点があり、学名が記されていないので、現在のどの種にあたるのか不明なものが多い。したがってはっきりしている種以外は除外した。

種名の同定は高桑正敏氏をわずらわしたものが多い。ここに同氏に深く感謝申し上げる。

1. ツシムナクボサビカミキリ *Arhopalus unicolor* (GAHAN)  
1♂, 23. vi. 1967, 中里町, 灯火; 1♂, 20. viii. 1969, 岩木山, 灯火。
2. オオクロカミキリ *Megasemum quadricostulatum* KRAATZ.  
1♀, 24. vii. 1971, 金木町, 灯火; 2♂♂, 29. v. 1965, 飯詰山(五所川原市)。  
金木町の採集は、灯火に来たと思われるものであるが、飯詰山のものは人工植栽によるヒノキの衰弱木から羽化脱出中のものであった。ヒバの材からも採集された。
3. *Rhagium pseudojaponicum* PODANY  
5♂♂, 1♀, 11. v. 1970, 十二湖, 福地光紀; 1♂, 4♀♀, 12幼虫, 1蛹, 16. viii. 1970, 八甲田(成虫は死骸); 23♂♂, 18♀♀, 16. x. 1970, 八甲田。  
十二湖の福地氏の採集はアカマツの伐木に飛来したものを採ったという。八甲田ではオオシラビソの立枯木樹皮をはいで採集したもので、蛹は9月中旬に羽化した。そこで10月に再度採集を試み多数の成虫を得た。種名同定は青木重幸氏による。
4. ヒメハナカミキリ *Pidonia mutata* BATES  
1♀, 7. vi. 1970, 十和湖。  
セスジヒメハナカミキリの中に1頭だけ入っており、採集の状況等全く不明である。
5. ヨコモンヒメハナカミキリ *Pidonia insuturata* PIC  
1♂, 15. vi. 1966, 中里町; 3♂♂, 16. vi. 1966, 十二湖; 22. vi. 1970, 1♂ 2♀♀, 同; 21. vi. 1969, 1♂, 同。  
ミズキ, アマニウの花からも採れたが、イワガラミ, ゴトウヅルの花には多いように思われる。はじめはミワヒメハナカミキリと混同されていた。
6. チビハナカミキリ *Grammoptera chalybeella* BATES  
1♂, 23. v. 1967, 十二湖; 1♀, 2. viii. 1968, 和田山(大鰐町); 他多数。  
ヤマモミジの花, ミズキの花に多い。大鰐町戸和田山の記録が1年で一番遅く、エゾニウの花から採集した。下山氏のリストには *Gram. sp.* となっている。

る。

7. ホクチチビハナカミキリ *Alosterna tabacicolor* DEGEER.  
1♀, 16. vi. 1973, 追良瀬。  
著者の手元には上記の標本以外残っていない。しかし、津軽半島でも4個体以上を採集している。チビハナカミキリの変異と考えていたが、高桑氏は本種と同定された。
8. キモンハナカミキリ *Leptura duodecimgut-tata* FABRICIUS  
1♀, 22. vi. 1967, 八甲田; 2♀, 28. vii. 1971, 酸ヶ湯(八甲田) 福地光紀。  
福地光紀氏の採集品を見て本種と確認した。
9. ナカネアメイロカミキリ *Obrium nakanei* OHBAYASHI  
1♂, 26. vii. 1966, 中里, 今純一; 1♀, 30. vii. 1966, 中里町, 今純一; 7♂♂, 1♀, 22. vii. 1966, 金木町。  
いづれも、センノキの材に飛来した。
10. タカオメダカカミキリ *Stenhomalus takao-sanus* OHBAYASHI  
1♂, 3♀♀, 13. v. 1973, 十二湖。  
ヤマモミジの花から採集した。
11. トラフホソバナカミキリ *Thranis variegatus* BATES  
1♂, 1♀, 16. viii. 1966, 十二湖, 近藤格; 2♀♀, 9. viii. 1974, 大童子川, 鶴賀谷修, 今純一。  
十二湖ではヤチダモの材及び枯枝を歩行中を採集, 大童子川ではブナの樹液から採集した。
12. トガリバアカネトラカミキリ *Anaglyptus nipponensis* BATES  
1♂, 3♀♀, 16. vi. 1966, 十二湖。  
アマニウ, ミズキの花から採集した。この仲間のうち、エゾトラ, アカジマトラ, スギ, アカネトラはすぐ判別がついたが、本種とマツシタトラは、以前から本種は青森に居ないとされていたためか混同されていた。したがって、青森県のリストの中に一度も出て来ないが、マツシタトラカミキリを本種と誤っていることが多い。本県ではどうゆうわけか、トガリバアカネとマツシタトラカミキリとを逆にしている場合が多い。
13. ヒメシラオビカミキリ *Pogonocherus fasciculatus* DEGEER  
1♂, 3. v. 1964, 梵珠山; 1♂, 12. v. 1966, 金木町, 鶴賀谷修。  
ミズナラ材木から採集した。
14. クリチビカミキリ *Sybra kuri* OHBAYASHI et HAYASHI  
1♂, 24. vi. 1973, 小泊村冬部沢。  
カマツカの花から採集した。

15. ジュウジクロカミキリ *Clytosemia pulchra* BATES

1♂, 22. vi. 1968, 十二湖; 1♀, 8. viii. 1973, 追良瀬川。

追良瀬川では、サワクルミの細い枯枝に静止していた。

16. ニセリンゴカミキリ *Oberia mixta* BATES

1♀, 26. vi. 1960, 座頭石(弘前市)。

以上の16種について採集時の状況を加えてあげたが、このうち *Rhagium* については青木(1972)によって、著者の採集品も加えて発表されている。

この他、*Molorchus* に属する数種が、最近高校生によって採集されているというが、標本を見ただけで詳しいことは知らない。(青森県五所川原市)

○大菩薩峠でニセフタオビチビハナカミキリを採集

大菩薩峠は日本でも *Pidonia* の豊富な産地の一つであるが、今まで本種の明らかな記録は知られていない。しかし筆者等は、大菩薩峠付近で、19頭の本種を採集したので、ここに報告する。

*Pidonia testacea* (MATSUSHITA) ニセフタオビチビハナカミキリ

2♀, 30. vi. 1974, 斎藤秀生採集; 13♂♂

4♀, 26. vii. 1975, 下村徹採集。

本種は、大菩薩峠付近(1700—1800m)の針葉樹林帯で採集したものであり、長兵衛小屋以下の日川林道では1個体も採集できず、すべて、本種に近縁の *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビチビハナカミキリであった。

なお、この2種については、鞘翅の毛の密度及び長さで区別した。

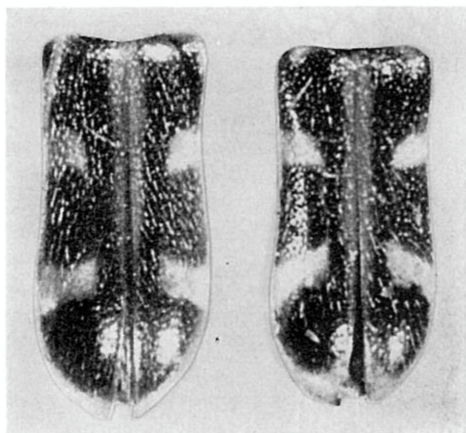


写真 左 *P. testacea*: 右 *P. puziloi*

(東京農大, 斎藤秀生・下村徹)

○アキオサムシの採集記録

*Apotomopterus japonicus chugokuensis*

NAKANE アキオサムシ

1♀, 京都府芦生演習林野田畑, 14. viii. 1972,

筆者採集, 富永修氏所蔵。

近畿地方のオサムシについては、日浦勇氏らによる調査報告〔大阪市立自然科学博物館研究報告, 25, pp. 27~42(1971)]で各種の分布概要はほぼ明らかにされたが、それによればアキオサムシの分布は兵庫県篠山が東限となっていた。筆者採集の上記標本は予想外に東まで分布が広がっていたことを示したものであるが、後日富永氏により同所より更に1♀が追加確認された由である。(宇治市, 水野弘造)

○シラホシカミキリの加害植物

1957年頃は東京都世田谷区岡本の多摩川に面した急斜面はほとんどが雑木林であった。その中に生えているガマズミは5月頃にはほとんどの新芽がキクスイカミキリにやられた菊の茎みたいにしおれていた。その犯人はあたりによく見られるシラホシカミキリだろうと推定されたが、その加害現場を確かめる機会はなかなかなく、実際に新芽をかじっているのを見たのは1959年5月になってからである。シラホシカミキリの加害植物については成虫が種々の広葉樹の葉脈を線状にかじると言う記録はあるが、キクスイカミキリの様にガマズミの新梢の先をしおれさせると言う記録は全く見当たらない。私も各地でシラホシカミキリを採っているが、いつも線状にかじった食痕を残すものか、薪や伐木にきたものばかりで、この様に新梢を枯らすものは見たことがない。しかも、私の家のあたりにいたガマズミに加害するシラホシカミキリは、山地のものに較べて、小型で褐色部が淡く、白斑が一般に不鮮明で、特に雄では著しい。この型のものは1967年5月中旬に伊豆御蔵島でも採集したが、他ではまだ見たことがない。恐らくは関東地方南部から伊豆、箱根地方を経て伊豆諸島に至る地域に特有な型(種?)ではないかと考えているが、どなたか専門の方の御意見を伺えれば幸である。なお、岡本の本種の生息地は、今では人家が並び、ガマズミは稀ながら残ってはいるが、本種の姿は全く見当たらない。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ミヤマナカボソタマムシの食樹

ミヤマナカボソタマムシ *Coraeus montanus* MIWA & CHŪJŌ, 1940 の食樹については現在まで確実な報告がなかったが、筆者はハイノキ科のタンナサワフタギ *Symplocos argutidens* NAKAI から羽化脱出した1♀を所蔵しているので報告したい。

1♀, 静岡県天城山万二郎岳, 29. v. 1974, 和泉敦夫採集。

標本を御提供下さった和泉敦夫氏に深謝する。

[横浜市磯子区, 秋山黄洋]

○サビノコギリゾウ石垣島に産す

サビノコギリゾウ *Ixalma hilleri* ROELOFS は本属中で最も特異な形態をしており、口吻が非常に短いことなどにより、他種とは容易に区別出来る。本種の分布は、奄美大島、九州、四国、本州からの記録はあるが、奄美大島以南の採集記録は聞かない。筆者は石垣島で本種を1頭採集しているの、ここに記録しておく。1頭, 石垣島通路川, 29. iii. 1973。

(和歌山県楠本中学校, 的場 績)

### ○箱根神山中ダイミョウマルズハネカクシを採集

ダイミョウマルズハネカクシ(新称) *Domene daimio* SHARP は1880年5月に箱根宮の下で, George LEWIS により採集された1雄の標本に基づいて SHARP (1889) により記載発表された種であるが, その後本種についての知見は全く得られていない。しかしながら, はからずも箱根神山西側斜面(標高約1100m)の森林中の落葉下より本種を発見することが出来たのでここに記録しておきたい。

2♂♂, 3♀♀, 箱根神山, 25. v. 1974: 4♂♂, 1♀, 同, 1. vi. 1974; 2♂♂, 2♀♀, 同, 26. v. 1975; 3♀♀, 同, 27. viii. 1975.

なお, 同時に多数のコマルズハネカクシ *Domene curtipennis* SHARP を採集することが出来たが, 箱根からは同属のオオマルズハネカクシ *D. crassicornis* SHARP も箱根仙石原や千条の滝で採集されている。この種は本邦産同属の他種とは体長が大型なこと(12.5mm), 触角の長いこと, 頭部が細長いこと, 翅端部が黄赤色を呈すること及び雄腹部下面の第2次性徴等により比較的容易に識別できる。

(東京都町田市, 柴田泰利)

### ○コメツキムシの分布2題

#### 1. ムネアカツヤケシコメツキ *Megapenthes opacus* CANDÈZE

1頭, 群馬県湯浅曾川, 2. vii. 1972, 鈴木互採集;  
1頭, 福島県松枝岐, 9. vi. 1975, 川田一之採集。

本種は北海道, 本州, 九州に分布することが知られているが, 比較的稀な種である。筆者は上記の如く, 群馬県産と川田一之氏から恵与を受けた福島県産の個体を検したので記録しておく。

2. ヒメクロナガコメツキ *Elater candezei* (LEWIS) (写真参照)

1頭, 群馬県湯浅曾川, 23. viii. 1974, 関口克己採集。

本種は1881年に LEWIS が長崎で採集した個体に基づいて同氏が1894年に記載した種で, 現在のところ長崎県と三重県からの記録があるにすぎない。筆者の手許に関口克己氏より恵与を受けた上記の個体があるので報告しておく。

この短報を発表するにあたり種々御教示いただいた大平仁夫博士, 並びに標本を提供された上記両氏に深く感謝いたします。

(東京農大, 鈴木 互)

### ○和歌山市のスナサビキコリ

スナサビキコリ *Meristhus niponensis* LEWIS, 1894は, 局地的分布を示すようで, 詳しいことは本誌Nos. 27. 28 で正木氏が記録されている。筆者は, 和歌山市湊薬種畑の石鹼工場敷地内で, 夜間(21時

~24時位, 大体24時を過ぎると, 夜霧で草が湿り本種は1頭も採集されない)水銀灯下の草地(全面砂地)で, わずか幅30cm, 横150cm位の草のない砂地で, 本年8月24日に12頭, 25日に12頭, 30日に4頭と31日に1頭, 9月7日に2頭, 8日に2頭と8月下旬から9月上旬にかけて比較的多数の本種を採集しているので報告しておく。また, 採集する際懐中電燈の光を当てると, 非常に活発に行動し, 中型の蟻なみにすばやく障害物の下へ潜ってしまう。

(和歌山市, 平松広吉)

### ○マメクワガタの本州からの記録

マメクワガタ *Figulus punctatus* WATERHOUSE の分布については, 九州南部, 対馬, 四国(足摺), 伊豆御蔵島, 台湾が知られている。私は下記の如く得たので報告する。

4頭(2♂, 2♀)。和歌山県西牟婁郡すさみ町稲積島, 7. ix. 1975。

この島は周囲約700m, 標高68mの小島であったが現在は防潮堤により陸つづきとなっている。黒潮の紀南分枝流があたる外洋には急斜面で, 内湾にはかなりゆるやかな浜で接している。スダジイ, タブを主にした林内には, オオタニワタリ, ハカマカズラが自生し, 林縁の急斜面にはウバメガシの大径樹が覆うなど, かなり安定した森林である。マメクワガタは尾根部で倒れていたウバメガシ(径30cm)の枯木で見出した。腕ぐらいの太さの枝は, 内部までやわらかく朽ちていて, その樹皮下に数頭ずつ, もぐりこんでいるという感じであった。同じ株より, アヤムネスジタマムシの食痕も見つかった。

本種同定の労を頂いた上, 種々御教示を賜った黒沢良彦氏, 御協力を頂いた乾風登氏に厚く御礼申し上げる次第である。(和歌山県由良町, 吉田元重)

### —<紹介>—

Coleoptera:Staphylinidae Oxytelini from Ceylon. P. M. HAMMOND

(Ent. scand.Suppl., 4: 141—178. 1973—'75).

この論文は1962年, Lund University による Ceylon Expedition によってもたらされた資料を基礎にした研究結果である。著者の P. M. HAMMOND は現在, 大英博物館の昆虫部に勤務し, ハネカクシ類に関して幅広い研究を進めている気鋭の専門家で, 中根猛彦博士(1972)の「欧米の自然史博物館を訪ねて(2)」(昆虫と自然, 7(7): 16—19)でもそのプロフィールの一端が紹介されている。最近では, 世界中の Oxytelinae セスジハネカクシ亜科に含まれる各種を実際に検視し, この亜科の系統について意欲的な研究を続けているが, 上記論文もこの研究から派生した一分枝である。

本論文の内容はセイロ産 Oxytelini セスジハネカクシ族に関する研究史が初めに紹介され, 次いで同島産 Oxytelini に含まれる属, またそれら各属に含まれる種の検索と解説が附され, さらに同島の Oxytelini 相の構成要素についての考察がなされて

いる。これらの記述はハネカクシ類を専門に研究する者ばかりでなく分布等に関心を抱く同好者にとっても興味ある内容と考えられる。また、各種の解説には個体間の地理的変異にもふれているが、これは広く世界中の主要な博物館に保管されている標本に基づいている。従って、その中には日本産の個体も含まれており、その記録が日本からの新記録となっている種もある。それと同時に、セイロン産 *Oxytelini* の各種に附されている synonymy はハネカクシ類を研究する者にとって見逃すことのできない部分で、これらは最後に Taxonomic summary としてもまとめられている。それにはセイロン産 *Oxytelini* 24種の synonymy が列記されているが、それらに関連している16種が同物異名とされ、また2種が所属変更にもなる異物同名となった結果、それぞれに新名が与えられている。この様な措置がとられた種の中には日本にも分布し、図鑑等によって広く知られた種も含まれているので下記の通り紹介することにした。

### 1. *Oxytelus ferrugineus* KRAATZ, 1859

本種はインド及びセイロンから記載された種で1874年には SHARP によって日本からも記録された (*O. laevior* の名で兵庫から記録)。その後、日本各地から多くの採集記録が残されている様に、きわめて普通に見られる種である。HAMMOND は本種及びインドから記載された *Oxytelus incisus* MOTSCH., 1857の双方のタイプ標本を比較検討した結果、これら両種を同一種と見做し、前者を後者の同物異名として取扱っている。なお、検視標本の中には小笠原及び沖縄産の個体が含まれているが、これらの地域は本種の分布地として新記録である。

### 2. *Oxytelus akazawaensis* BERNHAUER, 1907

本種は日本の Akazawa (明確な位置は不明) から得られた標本に基づいて記載された種である。HAMMOND は本種が東南アジアに分布している *Oxytelus migrator* FAUVEL, 1904 と同一種であろうと述べているが、前者が後者の同物異名であるとの命名法上の措置は行っていない。それは日本から送られた *O. akazawaensis* の標本を検視した結果だけにに基づく見解で、米国の Field Museum (Chicago) に保管されているタイプ標本を検視していないことに基づくものと判断される。

### 3. *Oxytelus nigriceps* KRAATZ, 1859

本種はインド及びセイロンを模式産地として記載され、日本からも記録されている (産地不明)。しかし HAMMOND の検視標本の中には沖縄産の個体が含まれており、これは本種の分布地として新記録である。

### 4. *Oxytelus varipennis* KRAATZ, 1859

従来、本種の分布地としては模式産地であるセイロン以外は知られていなかったが、HAMMOND は検視標本の産地としてインド亜大陸、中国及び日本をあげている。本種は好んで草食動物の糞に集来すると記されているが、現在まで日本からは未記録であった。

### 5. *Oxytelus opacifrons* SHARP, 1874

本種は日本から採集された個体に基づいて記載された種で、糞に集来する比較的普通な種である。HAMMOND は本種が西アジア及び北東アジアに広く分布している *Oxytelus bengalensis* ERICHSON, 1840 と同一種であると見做し、前者を後者の同物異名として取扱った。但し、体表上の構造には地理的変異が認められ、中国及び日本産個体ではこの構造が、西アジア産のものとは異なっていると指摘している。

### 6. *Anotylus nitidifrons* (WOLLASTON), 1871

本種は St. Helena を模式産地として記載された種で、温暖な各地域に広く分布しているが、日本からは未記録であった。しかし HAMMOND の検視標本の中には日本産の個体が含まれており、これは本種の分布地として新記録である。

(東京農大、渡辺泰明)

### ○訂正

前号の森田氏の報文のデータに校正のミスで誤りがありました。お詫びして訂正します。

4. vi. 1975 → 4. iv. 1975

(編集部)

### 甲虫談話会

会費 (1カ年) 1000円、次号は3月中旬発行予定、投稿〆切は2月10日。

発行人 黒沢良彦

発行人所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内  
電話 (364) 2311, 振替 東京 60664

### 昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

### タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3箇以下 ¥750, 4個以上 ¥650 (以下同様), 第2地帯 ¥850, ¥650, 第3地帯 ¥950, ¥750. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。

### タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25  
電話 (03) 811-4547